

## 7. 「橿円文化社会」の創生—都市文明と田舎文化の交流・連携・融合を目指して

### (1) 日本文化の特徴

それぞれ対立しながら調和している二つの焦点をもつ、橿円文化である。縄文文化と弥生文化、伝統的文化と外来文化、都市文明と田舎文化、などの質の異なった文化がそれぞれ独自性を保持しながら共存し、一つの統一体を目指している。

### (2) 伝統的な文化要素と外来的な文化要素との併存—日本歴史の特殊性

(木村時夫、『日本文化の伝統と変容』、成文堂、1990)

日本歴史を通観して感じることは、常に古くからの伝統的な文化要素と、海外から摂取したところの外来的な文化要素とが、同時に併存しているということである。そうしてこれら二つの文化的要素は時代によってそれぞれの比重を変化させ、それによって各時代の特殊性を展開している。すなわち或る時は外来の文化要素が伝統的な文化要素を圧倒し、政治も社会も文化も外来の文化を基調として展開するかと思えば、次には伝統的文化が台頭して外来的文化要素をしりぞけ、時に排外的な様相をすら呈する。要するに日本の歴史は前記二つの異なる文化要素の隆替の展開過程であったといえる。(273)

日本人の文化に対する対応は二つの矛盾する側面をもっていることが注意される。一つには新奇な外来文化に好奇心をもち、やがてこれに憧憬し、それをもって変革の刺激剤にする。しかしその反面、外来的文化の中に、日本人の伝統、古くからの風俗、習慣にそぐわないもの、ひいては日本の現状に整合しないものを見出すと、これを除去するか、或いは修正するかして伝統的文化要素と融合させ、やがて新しい文化の体制を形成してゆくのである。それは考え方によっては外来文化に対する強い憧憬と同時に、伝統的な文化に対する強い執着とを併せもっているということである。(274)

聖徳太子が摂政として行った政策は、どれをとっても重要でないものはない。太子の政策とその精神は、その後今日に至るまで、日本の歴史をつらぬく原型となったからである。聖徳太子は日本の国づくりの設計図をかいた人物なのである。その設計図はいくつかの大方針からできている。

大方針・その一：「仏教を取り入れ、仏様と日本の神様の両方を祀る」

—外国文化の良さに学び、日本の伝統文化の良さも守り、両方を生かす。(84-5)

#### \* 外来文化と伝統の統合

外来文化に偏見を持たず良いものは良いと積極的に導入するが、わが国の伝統も良いものは良いものとして自覚的に継承し続ける。そして、両者を統合して新たな日本を再構成していく。

### (3) 文明と文化のバランス

\* 「文明」—civilization という英語が示すように、もともとは“都市”(ないしは都市化)を意味する

\* 「文化」—カルチャーという英語が cultivate(耕す)に由来するように、“農耕”(ないし農村)を意味する。

つまり、文明とは“都市の論理”であり、文化とは“ムラ社会の論理”ということになる。「文明」というのは第一に“普遍性”を志向するものであり、第二に、それが農村ではなく都市的なものであるということから、“反自然性”という要素を大なり小なりもっている。

### (4) 「エココミュニティ社会」の創造

(大西 あつむ、『エココミュニティ社会の創造と展開』、農林統計協会、2007)

#### \* エココミュニティの概念

新しい社会づくりの理念を表現しようとした加藤敏春の造語。人間の行動に駆り立てるのは、欲望だけではなく温かさやふれあいを求める新しいコミュニティづくり「環境とコミュニティのパラダイムシフト」があり、最後はどのような社会を構築するかという「人間のパラダイムシフト」こそが問われると主張している。



# 「地域創生」を目指す学校

中国学園大学・中国短期大学学長 松畑 熙一

地域と学校の連携は、現代の教育において大きな課題となっています。そして、いまや日本のすべての地域が、全国・世界とのつながりを考えずには成り立たない時代となっています。

そこで、つながり(連)というキーワードによって、双方向に学校と地域がつながり、地域の歴史と文化を「保存」・「再生」し、全国・世界へ発信することを目指して、地域を創生する活動をしている地域があります。今回紹介するのは、こうした岡山発の報告です。

## 心のつながり(連)

私たちは今、非常に物に恵まれた便利な生活をしています。物の豊かさや便利さを中心とした経済成長の面からみれば、戦後の日本は確かに大きな成功を成し遂げました。しかし、本当の意味での「豊かさ」を実現しているでしょうか。「衣食足りて、礼節を知らず」の状態にあるのではないのでしょうか。個々の生活が心豊かで楽しいことかどうか、地域社会や地球環境にとって意義深いかどうかの社会的価値にどれほど繋がっているかが重要なポイントとなります。

「一人が変われば世界は変わる」のです。一人が変わり、つながりが生まれた時、世界は少しずつ変わっていくものです。水の特性を考えてみましょう。川の水面に、「一滴、一滴……」と水を垂らしたら、既にそれはただの「一滴」ではなく、すべての水と溶け込んで、地球上のすべての水に融和して連なった全体的存在となります。いわば「一滴の大河」は、すべての水に融和し連なった大河です。水のこの素晴らしい性格に学びたいものです。

「あなた」という「一滴」が他の人とつながったとき、「世界」という「大河」になるのです。人の大河も、一滴、一滴を越えて一つの流れとして連なった全体です。学ぶことも、自分が世界に生きる意味を発見し、意味を育てる営みであり、世界とのつながり(連)に目覚めることです。

## 「自然人間力」を培う

「自然」とはどういう意味でしょうか。自然と人間の関係はどのようなものでしょうか。あなたは自然の中にいますか、それとも外にいますか。

日本人は古来からずっと、人間と自然は本来一体のもので、人間は自然の中で自然に支えられ生きていくと考えてきました。しかし、現在使われている自然と人間を別とする考え方は、約百五十年前に近代ヨーロッパから人間主義、自我意識などが入ってきて、人間に對立する概念である「nature」の訳語として「自然」が使われるようになってからです。

人間は、本来自然の一部であり、自然界の一

員としての生命体です。人間は、他の生命と同様に自然の営みの全体に依存しています。ところが、これまでのように人間の主体性を一方的に優先させるような奢った考え方が、どれほど自然を破壊し、環境を汚染してきたでしょうか。今や、本来の「自然と人間の融和」が志向されねばなりません。

少しずつ自然から離れていく生活を続ける日々ではなく、生活の中に自然を取り戻しましょう。私たちが目指すべきは、自然界の中で人間が上位にあるとする人間中心主義に基づく「人間力」ではありません。「自然に生かされて生きる」人間力、すなわち「自然人間力」こそが教育の中核目標であるべきです。

## 家庭・学校・地域の連携による「地域力」の創生

自然の中で培われる学校と社会との関係については、「開かれた学校」ということがよく言われますが、これはあくまでも第一段階の問題です。学校を社会に「開放・出向」し、社会と「連携・交流」して、さらに望ましい社会を「振興・創生」する努力が必要です。家庭(力)と学校(力)と地域(力)とがバラバラに存在するのでなく、三者の連携・協働(連力)による地域創生が目指されねばなりません。

### 家庭力(人間基礎力)

×

### 学校力(人間総合力)

×

### 地域力(社会実践力・生涯学習力)

家庭は、人間として基礎力を育む場であり、他者への関心・愛着・信頼感というような社会力の基礎が培われていきます。

学校は、基本的な人間総合力を育む場であり、人間として生きる基礎・基本の徹底、道徳的価値、集団的規律の確保を目指しています。

地域は、本来生涯学習の場となり、家庭や学校と連携しながら社会実践力が少しずつでも育まれていけばと願うものです。

地域の子は地域で育つていくように、家庭・学校との協働による地域ぐるみの子育て(「子育て支援」が目指されねばなりません)。

### 産学官民一体による「地域創生」を目指して

経済成長期においては、国全体の豊かさが個人の豊かさにもつながる時代でした。しかし現在は、自分の幸せの形を自分のペースで追求する時代へと転換しています。地域住民主体による地域から全国・世界への発信が大切にされる時代になっているのです。

二十一世紀のキーワード、それは「つながり(連)」です。「人と人のつながり」、「人と自然のつながり」、「人と歴史とのつながり」の三つのつながりを重視した地域共生社会です。家庭・学校・地域のつながりに基づいて、新しい活力みなぎる地域を切り拓く学校像が希求されねばなりません。単なる一方向的な「社会貢献」ではなく、双方向的に地域と「連携・協働・融合」した学校です。

各教科の教育については、専門的な「学問知」に基づく知育に限定することなく、地域及び国際社会とのつながりからくる「社会知」に基づく地域社会教育が目指されるべきです。たとえば、英語で「Four Planet Lifestyle」(四

つの地球ライフスタイル)という表現があります。これは、何を意味しているのでしょうか。

世界の人口の約四分の一の先進国の人々が、地球の資源の約四分の三を使っているといいますが、もし人口の四分の三を占める発展途上国の人たちが、私達先進国の人と同じような資源の大量消費を始めたら、あと三つ、合計四つの地球が必要になります。「一つしかない地球で生きるライフスタイル」をいろいろな面から皆で考え、行動していかねければ、地球最後の日が遠からずやってくるでしょう。

望ましい地域創生を目指して、産学官民すべての協働による地域づくりが求められています。

## 岡山の新しい郷土料理 桃太郎鍋をみんなで作ってみよう!

### 材料(5人分)

だし汁	
水	750ml
鶏がら	7.5g
だし昆布	7.5g
かつお節	7.5g
淡口しょうゆ	50ml
みりん	25ml
桃太郎地鶏	150g (1切10g程度のぶつ切り)
鶏肉	100g (1切20g程度のぶつ切り)
吉備団子	1個
たかきび団子	1個 (赤米入り) (赤鬼)
よもぎ団子	1個 (青鬼)
白菜	300g
大根	150g (大型)
人参	100g (大型)
白葱	75g
ぶなしめじ	75g
春菊	50g
生椎茸	40g
黄にら	10g
ゆず	適量

### 作り方

- ① 水に鶏がら、だし昆布を入れ、火にかけ、沸騰直前にだし昆布を取り出し、かつお節を加える。再沸騰したら火を止めてざるでこす。淡口しょうゆとみりんを調味する。
- ② 野菜(大根と人参はそれぞれ犬と猿の型抜きにする)と肉を切る。
- ③ 沸騰しただし汁に鶏肉を入れ、火が通ったら野菜と団子を入れて寄せ鍋風にする。



### 著者プロフィール

松畑 照一 / まつはた けいichi  
中国学園大学・中国短期大学学長。  
1940年生まれ。岡山大学教育学部長・副学長などを歴任。専門は、英語教育学が中心だったが、現在は新しい「地域創生学」の確立を目指し、現在「吉備学会」会長。地域創生リーダー養成塾「連塾」(NPO法人)、福寿社会創生活動塾「健塾」なども主宰。

す。私たちは、備前・備中・備後・美作から成る吉備地域を中心とした「吉備学」の確立のため、二〇〇七年三月に「吉備学会」を設立しました。吉備という地域主体(ローカル)からの世界(グローバル)への発信、すなわち「ローバル社会」の実現を目指す営みが吉備学という地域創生学です。人間・社会・自然・文化のすべての課題解決を目指し、歴史と文化が育ててきた良きものを「保存」・「再生」し、より望ましいものを「創生」する活動を始めています。

産学官民すべての人達による地域創生活動の一つとして、生涯学習社会実現への営みがあります。生涯学習サイクルの中に学校を位置づけ、たとえば岡山県と香川県とが連携・協働して、「桃太郎文化・経済圏」を建設し、「桃太郎文化学」の確立を目指しています。その一環として、岡山の新しい郷土料理「桃太郎鍋」も開発しています。桃太郎伝説に基づく食材と無農薬野菜を中心に地産地消を目指した新しい郷土健康料理です。

このような望ましい地域を創生するために学校が率先し、地域住民の皆様といろいろな形で協働し、地域に輝く新しい学校を創っていくよう努力していきたいものです。